40年間存在した側頭部爆弾異物症例

斎藤 秀樹・河村 正三・市川銀一郎
西谷 全弘・荻原 徹

Fragment of Bomb Removed after 40 Years; A Case Report

Hideki Saito, Shouzo Kawamura, Ginichiro Ichikawa,
Masahiko Nishiya and Tooru Ogiwara
(Juntendo University)

A foreign body located in the right postauricular area was removed 40 years after a shrapnel injury in 1943. The patient visited our clinic complaining of pain behind his right ear. X-ray examination showed a dense foreign body located extracranially adjacent to the S.C.M.

Under general anesthesia an iron fragment was removed.

Key words: foreign body, bomb, postauricular area

緒 言

異物は耳鼻咽喉科領域で必ずしも稀なものではないがそのほとんどは短期間のうちに摘出され、長期に残存するものは比較的珍しいといえる。最近我々は約40年間耳後部に存在した銃弾異物を経験したので報告する。

症 例

72歳，男性。

現病歴：

昭和18年，空襲にて全身に爆弾の破片を受けた。

昭和30年頃右耳後部に腫脹出現するも疼痛なきため放置。

昭和61年12月耳後部の疼痛出現，徐々に増悪。

昭和61年12月10日当院耳鼻科外来初診。

昭和61年12月16日手術目的にて入院。

既往歴：

昭和29年肺結核にて肺部分切除。

昭和55年前立腺肥大にて切除術。

昭和56年臍径ヘルニアにて整復術。

家族歴：特記すべきことなし。

入院時現象

体格中等度，栄養状態良，WBC:6100, RBC:491×10⁴, Hb: 14.8, Hct: 44.9, 血沈値：18/37, その他，肝機能，腎機能，電解質等異常なし。

入院時，右耳後部に約 30 mm×30 mm の隆起性病変を認めた（図1）。創部の皮膚は変色・硬化しており，一部に膿瘍形成がみられた。その前縁は自潰し，ゾンデにて約 5 cm 挿入される。自潰した部分からは黄白色粘液性の膿汁が排出しており，細菌培養では黄色ぶどう球菌，

表皮ぶどう球菌, プロテウス等が検出された。

単純X線所見: 右乳様突起のやや後方に非透過性の陰影が確認でき(図2), 断層撮影でも耳後部の頭蓋外隆起性病変の中に異物が認められた。乳突蜂巣内もやや陰影増強しており, 被弾による戦傷が一部側頭骨にも及んだ事が示唆さ

図1 来院時局所写真

図2 来院時単純X線写真

図3 側頭部断層撮影

れる(図3)。

CT 所見: 耳後部に高吸収域を呈する部分を認め中心部よりアーチファクトが放射状におこっており, 異物はかなり硬いものと推測された(図4)。これらの検査所見より40年前の爆弾片が耳後部に残存しており, それに炎症性変化が伴ったものと考え全麻下に手術を行った。

手術所見

自潰した部分を含むように耳後部に紡錘形に切開をいれた。直視野の中に異物を含んでいる硬い肉芽組織を確認した。その周囲にも細かい破片が存在し, 肉芽組織とともに異物を摘出した(図5)。

摘出標本は約 10 mm×20 mm の鉄の破片で腐食し非常に脆い状態であった。

摘出術後経過良好にて第8病日に退院に至った。その後経過も順調である。

図4 CT

図5 摘出された爆弾破片

考 按

最近では頭頸部領域の銃、砲弾異物の報告は稀であるが1960年代頃迄は、数多くの報告がある。代表的なところでは1957年城所らは30例¹⁾、1962年森満らは53例²⁾、1963年太田らは47例³⁾の統計報告をしている(表1)。これらの報告では性、年齢、滞留期間、滞留部位、症状などに差異は認めない。特に滞留期間に関しては疾患の性質上からか1カ月以内にはほとんどの例が排出、摘出されている。3年以上の長期滞留例は我々が検索しえた範囲では1957年に城所らが21年の例を、1985年に森川ら⁴⁾が39年の例を報告しているのみである。城所らの例は空気銃で撃たれた鉛弾が眼窩内に滞留し21年後に複視等の症状で発病した例でこの複視は鉛中毒によるものであろうと述べている。

本症例に最も近いのは森川らの報告例であり戦時下に鉄の砲弾の破片を浴び耳下部に滞留したその破片が39年後に疼痛などの症状を出現させたものである。長期滞留には様々な原因が考えられるが滞留中ほとんど症状がないこと、戦時下などの特殊な状況下にあったこと、摘出困難な部位に存在したことなどが推測される。

異物の摘出の適応と時期に関しては城所は患者が苦痛を訴えず、副作用もなく、また手術を希望していなければ放置しておいてもよいが鉛中毒防止のため、また異物があるということに対する患者の不安を除くため、摘出の操作が患

者の生命に危険を及ぼさず、機能的障害を起こさぬ範囲内で除去に努力したほうがよいと述べている。また森川らは異物は体内にあることは不自然な状態であり摘出を行うことが妥当であろうと述べている。

異物の摘出の適応を論ずるうえでその組成を知ることは非常に重要であるが一般的な検査データからその情報を得るのは難しく、結局摘出後に知ることが多い⁴⁾⁵⁾。体内に入った金属は、被膜で覆われること、異物として作用し新生組織に取り囲まれ極めて吸収されにくい状態になり、中毒症状を呈することは稀であるとされている⁶⁾⁷⁾。しかし前述の受傷後21年経て発症した城所らの例、武内らの両下肢切断を要した症例⁸⁾など本邦でも異物による鉛中毒も報告され軽視はできない。いずれにせよ鉛中毒が確認された場合、今回のように感染を伴った場合は摘出の絶対適応と考えられる。

結 語

戦時下に空爆の破片による耳後部異物が殆ど無症状で約40年間滞留した例を報告した。

尚、本論文の要旨は日耳鼻東京都地方会第61回学術講演会にて発表しました。

参考文献

1) 城所信五郎, 石井英雄, 井上 正: 耳鼻科領域における空気銃弾射入の4症例. 耳喉 29 : 885~887, 1957.
2) 森満 保, 坂本 守: 翼口蓋窩異物症(空気銃弾)の一例. 耳鼻 8 : 279~283, 1962.
3) 太田良夫, 村上 陸: 篩骨洞及び鼻中隔異物(発気銃弾)の2症例. 耳喉 35 : 397~401, 1963.
4) 森川郁郎, 進 武幹, 富田まり子: 39年間頸部に存在した砲弾片異物の1例. 耳喉 57 : 7 ; 583~587, 1985.
5) 岡田芳明, 藤井千穂, 島崎修次: 鉛銃弾遺残症例の検討. 外科治療 32 : 6 ; 642~644, 1975.
6) Willard M : Lead absorption from bullets lodged in tissues. JAMA 115 : 1536~1541, 1940.
7) Friedrich B : Ueber die Giftwirkung der Blei-

表1 性、年齢、滞留期間、滞留部位の文献的比較

	森 満 ら (1962)	城 所 ら (1957)	太 田 ら (1963)
性	男:女=3:1	23/27が男	32/45が男
年 齢	20歳以下が 78%	20歳以下が 22/30	20歳以下が 過半数
滞留期間	1カ月以内は 83%	10日以内が 過半数	10日以内が 過半数
滞留部位	副鼻腔:29 鼻腔側壁:5 翼口蓋窩:3,他	副鼻腔:21 鼻腔側壁:2 鼻中隔:2,他	副鼻腔:36 眼窩:4 鼻中隔:4,他

Steckschüsse. Beith Z Klin Chir 126:324~335,
1922.

- 8) 武内 惇, 宮坂 裕, 沼田 一: 両下肢切断を要
した鉛中毒の1例. 整形外科 20:744~748,
1969.

(原稿採択: 平成元年6月1日
別刷請求先: 斎藤秀樹
〒113 東京都文京区本郷2-1-1
順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室)